

2025 年度優秀卒業研究賞 受賞者一覧

受賞者 12 名のうち、公開許諾の得られた 12 名について以下のとおり公表します。

氏名	石田 悠真
指導教員	中田 友貴・サトウ タツヤ
論題	『日韓における若年層の献血行動とその文化的背景—TEM による献血プロセスの比較検討—』
受賞理由	本研究は日韓の若者が献血行動に至るプロセスとその文化的差異を 2 つの研究から検討したものである。まず調査 1 では質問紙調査を行い、献血経験者と未経験者における献血イメージについて検討を行った。調査の結果、恐怖や痛みが未経験者の障壁となり、経験者は社会貢献と実利で行うことを明らかにした。その上で研究 2 では、日本人と韓国人の献血経験者を対象に、献血の開始理由と動機の変容を検討するためにインタビュー調査を行った。TEM を用いて分析した結果、韓国では制度から生まれる実利を動機として献血が始め、日本では周囲の関係性から他者への同行などから献血を始めるという差異があったが、個人的利益から献血を始めることの共通点を明らかにした。本研究は研究を段階的に深化させる構成であり、高い整合性を有している。また二国間の比較により、献血促進要因の普遍性と文化固有性を浮き彫りにしている。社会的意義も高く、優秀卒業研究賞に相応しい研究として評価できる。

氏名	井戸側 亮太
指導教員	若林 宏輔
論題	『自動運転車両における事故時の量刑判断と原因帰属 —— 運転者の注意状態と自動運転レベルが与える影響——』
受賞理由	本研究は自動車の自動運転について、今後普及が予測される自動運転レベル 3（条件付自動運転：特定条件下ではシステムが全運転操作を実施し、システムによる介入要求時のみ運転者が対応する）を対象とし、下位レベル（レベル 0：自動運転なし、レベル 1：運転支援程度の自動運転）と比較している。これに運転者の注意状態（居眠り・集中）を組み合わせ、交通事故時の責任帰属と量刑判断について実験を行った。結果、自動運転レベルの上昇に伴い、運転者への原因帰属は小さく、量刑は軽くなる傾向が認められた。また運転者への原因帰属傾向は維持されたものの、一方で自動車メーカーへの原因帰属は自動運転レベルに応じて増加せず、自動運転レベル 3 において運転者が集中していた場合にのみ高く評価された。総じて仮説を支持する結果が得られたとともに、自動運転レベルが高くなれば運転者の状態との関係で責任帰属や量刑判断が複雑化することを明確に示した点が評価された。

氏名	猪口 綸
指導教員	高橋 潔
論題	『女性起業家リーダーシップの構造 ―日本と米国在住の起業家の質的分析によるモデル化―』
受賞理由	本研究は、日本および米国に在住する女性起業家8名を対象にして、半構造化インタビューを実施し、質的分析を通じて女性起業家のリーダーシップの構成要素とその形成プロセスを明らかにした。分析の結果、リーダーシップを過去・現在・未来に対応する3段階のプロセスとして捉えられていることが示された。また、社会的影響力を強く求める米国に対し、日本では自己像としてリーダーシップを捉える傾向があることから、日米間でリーダーシップの差異も見出された。わが国で実施される質的研究では、日本における現象のみにアプローチすることが通常だが、本研究では、筆者が渡米した際に、カリフォルニア州においても同様の聞き取り調査を行っている。文化や民族を超えた視点でリーダーシップを検討し、日米比較を行うに至っている。わが国におけるリーダーシップ研究や、女性活躍推進に向けての重要な指針を与えるものであり、優秀卒業研究賞に相応しい研究として評価できる。

氏名	岩本 寛子
指導教員	宮口 幸治
論題	『食行動異常がメディアリテラシーに与える影響 ―ボディイメージを媒介して―』
受賞理由	食行動異常がボディイメージを介して、メディア情報に示される外見理想の内面化に影響するプロセスを検討することを目的としたものである。大学生・大学院生315名を対象に質問紙調査を実施し、食行動異常、ポジティブボディイメージ、ネガティブボディイメージ、内面化傾向の関連についてパス解析および多母集団同時分析を行っている。その結果、食行動異常はポジティブボディイメージを低下させる一方で、ガティブボディイメージを高め、両者を通じて内面化傾向に関連すること、性別による検討では、女性ではポジティブボディイメージがネガティブボディイメージの低下を介して内面化を抑制するのに対し、男性ではネガティブボディイメージが内面化傾向に強く関連するなど、媒介経路の性差も示した。メディアリテラシーを前提とする従来モデルとは異なり、食行動異常について知る上で意義のある論文である。

氏名	尾川 琴乃
指導教員	増田 梨花
論題	『音楽聴取の与える心理的影響 ―被災地における心理的支援の検討―』
受賞理由	本研究は、音楽聴取が被災者へ与える心理的影響を、量的研究と質的研究の2つの方法で検討した。その結果、音楽聴取が直接的な心のケアになるのではなく、被災者と支援者との「対等な関係性」が構築されるきっかけになるものであるという知見が導き出された。心のケアの捉え方に「対等な関係性」という新たな知見が生まれたことは、高く評価できる。著者は、吹奏楽部に所属し、能登半島地震の被災地でのボランティア活動として、8回ほど被災地に足を運びながら本研究を進めた。本研究は、音楽聴取の心理的機能を被災地の支援経験から考察したこと、さらに、支援者の語りから音楽聴取と心のケアの関連を丁寧に分析したことが、心のケアの本質を見出すことに繋がった意義のある研究である。本研究は、被災地における心理的支援の新たな介入として寄与するのみならず、被災地の臨床的介入方法への応用も期待される。以上より、本論文は優秀卒業研究賞に値するものと強く評価する。

氏名	桂田 真緒
指導教員	宇都宮 博
論題	『不妊治療に取り組む女性の支援ニーズと心理専門職に求められる役割に関する質的検討 ―治療開始時から育児期に至るまでの経験の語りから―』
受賞理由	本研究は、不妊治療を経て妊娠・出産に至った5名の成人女性の語りをもとに、KJ法による分析を通して、治療時から育児期に至るまでの心理過程と各時期における支援ニーズについて明らかにするために行われたものである。各時期における治療経験にもとづく不安や葛藤が語られ、不妊治療経験者の心理的負担が治療期から育児期まで長期に持続している可能性が示された。また、医療従事者の多忙さを反映してか、説明や寄り添いの不足などを経験し、医療従事者に相談しにくい実態も浮かび上がっている。心理専門職に期待される役割として、専門的支援の有用性が指摘される中、治療から一定の距離が保たれていることで得られる客観的立場の利点が示された点も注目に値する。対象者の確保も含め、様々な観点から調査研究の実現が困難なテーマながら、丁寧な手続きをたどり、根気強く向き合い得られた知見は貴重である。生殖心理学の領域において、高く評価される研究と考えられる。

氏名	塩野 透矢
指導教員	永井 聖剛
論題	『正直な顔は魅力的か ―逆相関法を用いた“good is beautiful”ステレオタイプの検討―
受賞理由	「良い者は美しい」というステレオタイプが存在し対象人物の正直さ認知が顔魅力評価に正の影響を与えることが知られるが、人々が実際に正直者をどのような顔としてイメージするかはこれまで十分に明らかにされてこなかった。そこで、本卒業研究では心理学的逆相関法 Classification Image (CI) を用いて正直/非正直という性格特性から想起される顔表象を可視化し、本ステレオタイプについて検討した。実験の結果、参加者間に共通する正直者顔の視覚的特徴を抽出すると共に個人差を含めた内的表象の構造に言及し、正直度の強さに応じて顔魅力評価が線形に増加することを示した。従来、実証的に検討することが困難であった問題に対して CI の特長を活かした新たなアプローチを提示し、社会的認知と顔認知を架橋する本研究は、関連する複数分野に重要な示唆を与える高い学術的価値を備えている。以上から、優秀卒業研究賞に相応しい論文であると判断する。

氏名	島崎 桜
指導教員	川野 健治
論題	『子ども食堂におけるスタッフと参加者の関係性 ―スタッフの視点から相互主体性と手がかりに着目して―』
受賞理由	本研究は、近年増加している子ども食堂のうち、ある共生食堂でのスタッフと参加者の関係性の構築過程に焦点をあてた、フィールドワークである。二年間スタッフとして関わった子ども食堂で三回生からフィールドノーツを作成し、分析結果から、当初想定していたように「利用者が環境になじむ」のではなく、「利用者とスタッフが相互に構築する」プロセスであると研究仮説を修正した。これをもとに利用者を「参加者」、相互交渉の要素を「働きかけ」と概念化し、媒介する「手がかり」の分類と偏りを整理した。これをもとに、3組のスタッフへのグループインタビューを行い、主体的参加の要件を抽出した。長期間の参与観察からボトムアップに独自の概念化をしたこと、それを踏まえた研究の展開、さらに卒論を越えてすでに利用者のインタビューも行っている。時宜に合ったテーマに势力的に取り組んだ貴重な研究知見とオリジナル性を高く評価し、優秀卒業研究賞に相応しい研究であると判断した。

氏名	田中 和海
指導教員	野田 実希
論題	『自伝的記憶の内容が自己肯定感へ与える影響 ―インタビュー法を用いて―』
受賞理由	本研究は自伝的記憶が自己肯定感に及ぼす影響について、量的・質的研究を組み合わせて検討したものである。先行研究では、自伝的記憶のどのような内容が自己肯定感と関連するのかが主に検討されてきた一方で、本研究では、自己やアイデンティティが立ち現れる場として「語り」に着目し、インタビュー法を用いて検討している。語りの前後での自己肯定感を比較した結果、記憶の内容の肯定・否定にかかわらず有意な向上が認められたことから、考察の焦点を語りの展開のされ方へと移している点が高く評価できる。KJ法により抽出された4つの語りのパターンから、語り方の違いに応じて体験の意味づけや受けとめ方が異なり、語り直す過程や聞き手のあり方がその変化に関与する可能性が示された。本研究は、探索的検討を通じて、自伝的記憶と自己との関係、ならびに「語ること」の臨床的意義について、今後の検討につながる発展的な視点を示しており、卒業論文として優れた到達点にある。

氏名	村井 里帆
指導教員	村山 綾
論題	『認知的方略と誇大広告への反応との関連』
受賞理由	本研究は、ネガティブ感情の適応的機能に着目し、防衛的悲観主義（将来への不安に対して入念な準備で対処する認知方略）と誇大広告への反応との関連を検討したものである。クラスター分析の結果、防衛的悲観主義の特徴を明確に示す群は抽出されず、悲観主義群、楽観主義群、特徴なし群の三群が得られた。誇大広告の商品を購入するか否かについては、認知方略群間で有意な差は認められなかった。しかし、判断理由に関するテキストデータの分析から、悲観主義群は誇大広告内で小さく提示された購入者に不利な情報に気づきやすく、「リスク」「条件」「解約」などの語を用いた損失回避的で慎重な判断を行う傾向が示された。頻出語分析、TF-IDF分析、共起ネットワーク分析を組み合わせた多角的な分析により、現代社会でも問題となっている誇大広告への反応という具体的文脈の中で、ネガティブ感情の適応的機能を示唆した点は高く評価でき、優秀卒業研究賞に値すると考えられる。

氏名	由里 潔
指導教員	土田 宣明
論題	『大学生が認知する親の養育スタイルと自己制御能力の関連』
受賞理由	本論文を優秀論文賞に選出した理由は、共分散構造分析による全体的な因果モデルの検証にとどまらず、クラスター分析を用いて両親の養育態度の組み合わせを類型化し、詳細な検討を行った点にある。共分散構造分析では全体傾向の把握に留まるが、本研究はクラスター分析により、父母の「応答性」と「要求性」のバランスに基づき、「父低関与群」を含む4つの具体的な養育パターンを抽出した。これにより、父母で関わり方が異なるケースなどが、子どもの愛着や社会的自己制御に与える固有の影響を明らかにした。さらに、この統計的類型化に基づき対象者を選定してインタビュー調査へ展開した点が秀逸である。クラスター分析を橋渡しとして、数値には表れない親子関係の「質」的側面や、親の「見守り」に対する解釈の差異を深掘りし、混合研究法として緻密な実証を行った点が高く評価された。

氏名	吉川 琴葉
指導教員	岡本 直子
論題	『足浴・温泉 VR 動画視聴とリラクゼーションの関連性：心拍変動と気分変化に着目して』
受賞理由	本論文は、足浴および温泉 VR 視聴という日常かつ実践的な介入と心身のリラクゼーションがいかなる関連性を有するかについて、生理的指標と心理的指標の双方から多面的に検討した点に高い学術的価値を有するものである。特に、介入条件を3群に設定し、一時的気分尺度における下位尺度ごとの主効果および交互作用を精緻に分析しており、リラクゼーション研究におけるVR活用の可能性と課題を明確に示した点が優れている。また、心拍変動を用いた生理指標の測定を組み合わせることで、心理指標との比較検討を可能にし、今後の介入研究の方向性を示す基盤的データを提供している。加えて、得られた結果に対し方法的改善点を自ら批判的に考察し、今後の研究発展に資する視座を提示している点も評価できる。以上より、本研究は卒業論文として十分な独創性と妥当性を備えており、優秀卒業研究賞に値する成果であると判断する。

以上